令和5年 1月31日(水)　第356号

滑稽新聞

滑稽新聞社
〒444-0103 愛知県額田郡幸田町
大字大草字祐宜屋敷(オギヤシキ)63-1
おかげおかげで迎えられた新聞号
第356号 創刊1990年7月28日
Email kokkei1949@yahoo.co.jp

おかげさまで古希を迎えることができました。

すぎうら やすよ

子どもの頃、腎臓病を患い、長期に入院していて、いろいろな患者さんを見ながら、自分は長生きはできないかもしれないと思っていました。

結婚して三年後優しかった主人の母が六十三歳で亡くなり、本当に悲しかったです。

私の母は肺癌がみつかり、少しだけ親孝行させてもらう時間が与えられましたが、六十八歳で霊界へ旅立ちました。

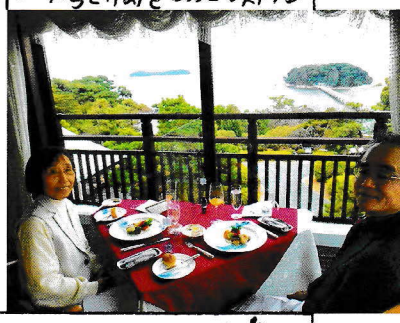
その頃から、"二人の母の年齢を越えるまで生きようッ"というのが私の目標になりました。

そして迎えた七十歳"古希"。

二人の母に守ってもらったような気がします。

念願だった「浦郡クラブ・ホテル山」のランチでお祝いしてもらいました。最高の七十歳の誕生日になりました。

当ホテル専用スープ皿

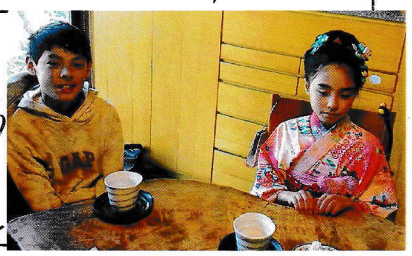


三河湾と竹島を臨むレストラン

笑門来福 メルボルン御一行様

豪州メルボルンから実家(豊川)に帰郷していた姪のアツコが家族で我が家に来てくれた。夫のマークが幸田に行きたい、と言ったらしい。赤ん坊だったリリアンが見違える程可愛い少女になったのにはビックリ。この日はお正月の着付けで登場。毎年末、一カ月の休暇を取って家族で日本に滞在。十二分の一は日本人と言える。リリアンは今回叔母が住む川崎の小学校に2週間だけ短期留学。いったそうな。言葉は大丈夫。日常、パパと話す時は英語。ママと話す時は日本語なので、生れながらにしてバイリンガル。それも母親譲りの東三河弁。言葉の弾みで、〇〇〇だにー」のリリアンの一言に皆大笑い。杉浦家は正月早々「笑門来福」となった。

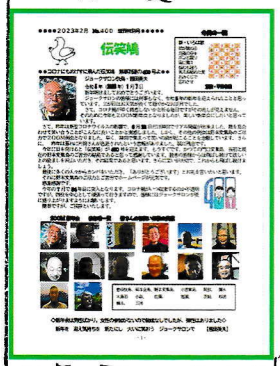
山田パパママとメルボルン御一行



リリアン(右)とカクル

400号伝笑鳩飛来

ジョークやユーモアを楽しむ仲間が、毎月集まるジョークサロン。コロナ禍で、今はズーム開催。愛知からも参加できる。一月例会で「身近に陽性患者が出たけれど私は感染しなかった。普段から笑いのある生活で、免疫力が高かったからだと思う」と近況報告したら曽田英夫会長(伏鳥)が「全くその通り!」と賛同して下さった。機関誌「伝笑鳩」が遂に400号に到達。「今月の「笑」22年度の人気第一位は門口泰宜氏のだじゃれ。「納豆食って体大豆にして下さい。昔の事を懐しがるノスタルジジイ。来ても何もくれない景品急行。」



34年の歴史ある"笑話誌"

→途中乗車したのにすっかり一人前のジョークサロンの同人みたいな顔をしている杉浦編集長

今年も始まった「楽しい事探し」

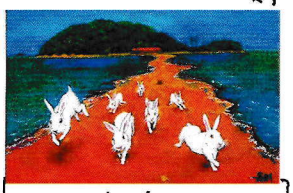
穏やかに正月を迎えた。それでも新年早々、楽しい事や面白い事がやって来た。先ずは年賀状。今年もたくさんの方々から頂いた。山のように積み上った賀状を見て「これが札束だったら何百万円になるだろうか？」などと賤しい想像をしながら「いやいや、この交友はお金には替えられぬ」と戒めたり。今年の年賀状の最高傑作はパロディ笑刻家岩崎祐司氏の最近作「むらさきしきぶとん」。一目見て吹き出した。氏は現役バリバリで創作継続中。昨年だけで30作品創られたとの事。「雨降ってじじい固まる」等タイトルを聞いただけで作品を見たくなる。

正月と言えば斎藤吾朗画伯のアトリエ展。干支に因んで兎の絵が多かった。かつて我が家で飼っていた兎が増え過ぎてうさぎ島に放ちに行った。あの兎たちはその後どうしただろうか？毎日元気に「うさぎ跳び」で体を鍛え、子孫繁栄しているだろうか？絵を見ながら思い浮かべた。

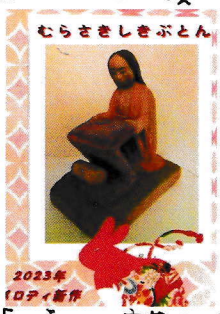
凄いぞ、切り絵って!!

岡島由紀子と言う切り絵作家が辛田町に居る。「国際切り絵コンクール」で準グランプリを受賞。図書館ギャラリーの個展を観に行った。ハサミ一本でこんなにも微細な芸術作品ができるなんて！「岡島さんは切り絵と言うよりキレイですね」と美人に弱い編集長の一言に……。

作品「門出」の前で。中島ゆきの世界だ！



かつては兎の楽園だったうさぎ島



「しきぶとん」に座蒲団!!

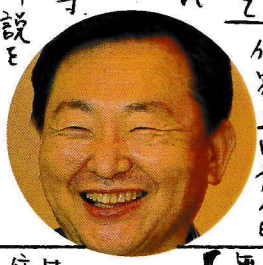
やすらぎの門松

じわり家康モーディに

「徳川家康の天下取り」と言うテーマで歴史作家上田秀人氏の講演会が開かれた。家康人気で会場は満席。「作家なので書くのは得意ですが喋るのは上手くないのです…」と断りながら次から次へと興味深い話、秘話、トリビアの数々を披露して下さった。「大河ドラマでの鎧兜姿は実際と違います。髪が長いまげは兜がずれてしまいます。」と言う専門家的な指摘。三河は京都に近いので天下取りに有利だったと言う客観的意見等。

「一番困るのは、歴史学者が色々研究・調査して新説を言い出すことです。作家は見たこともない、会ったこともない人の事を書く仕事なのです。一旦書いて出版した本を新説で書き直すなんてしたくないのですよ。伊賀越えは別ルートだったとか、大坂夏の陣は無かっただとか。」

会場には"歴史オタク"も多く、当地の家康モードの高まりが感じられた。



作家上田秀人氏

発汗雑感

▽弥栄月会（会社OB会）の50周年記念誌発行の重荷が杉浦編集長の肩に重くのしかかる。50肩になりはしないかと。「杉浦さん50肩なら20才若返る訳だから喜ばなくては」と接骨院の先生。▼映画館で観る中島みゆきの曲に酔いしれた。Dr.コトーの主題歌「銀の龍の背に乗って」「明日会う」「地上の星」そして「命の別名」。曲は勿論だが歌詞が秀逸。

大スクリーンでのライブは迫力

天がこの人を通して人々に伝えようとしたかのようだ。

▽君にも僕にも全ての人にも命に付く名前を「心」と呼ぶ。▽男の料理教室で先生が言われた。「料理なんてね一所懸命ママゴトみたいなものよ。」「先生はそう仰るけど昔の事なので覚えてない。ジジゴトですよ。」と生徒。

デザートのあんまんを作る生徒達

編集長 杉浦康司　副編集長 杉浦康代　題字 極楽亭立往生

【無断転載大歓迎】